要　　旨

武漢三鎮は武昌、漢陽、漢口である。武昌と漢陽は政治を中心に、漢口は商業の町である。近代に入ってから、長江沿岸には最古な貿易港は三つがあって、漢口はその中の一つである。明治三十年頃に、日本は中国に進出し、特に漢口で第二の大租界を設立された。当時、漢口に居る日本人が多かったので、漢口では銀行、工場、船舶会社などを設立された。その商人たちは日本実業協会を成立した。

本研究は、大正四年、五年漢口日本人実業協会年報を研究し翻訳したものである。経済活動に関する調査報告ですから、各種の表が多い。その中の数値は『漢口』という本から引用した部分もある。全部の内容は四章にわけている。

一、大正四年/五年漢口貿易

二、大正四年/五年漢口金融及び為替状況

三、大正四年/五年漢口重要輸出入品市況

四、雑纂

大正四年は第一革命から第二革命、欧州戦争、排貨運動、帝政問題などの現象が頻発にかかわらず、貿易額が新記録に示した。お茶及び農作物に基づき、輸出量は増えたため、貿易額も増加した。各直接貿易の輸出入に区別してみると、輸入方面において、日本は第一位を占めた。輸出方面において、輸入勢力と違い、露領太平洋沿岸地方は日本を超えて、首席を占めた。

大正五年の貿易経過を見るに、船舶不足、運賃昂騰、生産費が高いなどは輸入貿易に悪影響を与え、更に銀塊の暴騰は土貨輸出を阻害させられた。結果、前年を通じ、輸出入の貿易純額は大正四年より増加した。

輸出において、各商品は去年より著しく増加したものは：桐油、棉花、小麦などがある。棉花は上海より日本向けの輸出を増加し、桐油は米国向の輸出が多い。

翻訳を通じて、同時の歴史事実を解明し、中国語で出版しようと考えている、多くの中国研究者に役に立つと思う。